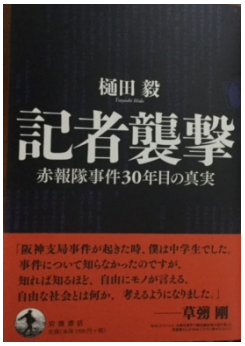
記者襲撃



表紙帯から―「阪神支局事件が起きた時、僕は中学生でした。事件について知らなかったのですが、知れば知るほど、自由にモノが言える、自由な社会とは何か、考えるようになりました。」―NHK スペシャル・未解決事件で樋田毅記者の役を演じた草彅剛さんが NHK ドラマに寄せたコメント。

このドラマを観て、見えない赤報隊を追い続ける樋田記者に興味をもち、さっそく本書を手にとった。表紙カバー裏から―1987 年 5 月 3 日憲法記念日の夜、朝日新聞の記者 2 人が突如、目出し帽をかぶった何者かに散弾銃で殺傷された阪神支局襲撃事件。この事件を含め、約 3 年 4 か月の間に計 8 件起きた「赤報隊」による襲撃・脅迫事件は、未解決のまま、2003 年 3 月にすべて公訴時効となっている。事件の 3 年前まで同支局に勤務し、発生当初から記者として特命取材班に加わり、時効後も一貫して事件を追い続けてきた著者による渾身の書き下ろし。日本の言論史上、類例のない事件を追跡した果てに見えてきたものとは ？

本書の大半は、取材の核心部分から構成される。「右翼」と「宗教」をキーワードに、筆者の長年にわたる取材が細かに綴られる。「新右翼」「新興宗教」関係者の事件との関わりが、長期にわたる取材により追及されるが、多くは闇に包まれたままだ。

ここでは、筆者が毎年の新入社員研修で講師役を務めてきたときのことを紹介したい。筆者は約 15 年前から、私も 5 月 3 日に初めて行った阪神支局 3 階の「事件資料室」で、当時の犯行を再現するように語り、研修の最後を、こう締めくくってきた。

「君たちは、かつて赤報隊に襲撃された新聞社に縁あって入ってきた。赤報隊はすべての朝日社員に死刑を言い渡すといい、小尻記者に対して本当に実行した。だから、小尻記者に向けられた銃弾は、われわれ一人ひとりに向けられたものだという言い方もできる。君たちがこれから朝日新聞社で仕事をするということは、赤報隊が再び動き出して、あるいは赤報隊の同調者が動き出して、その標的となる可能性がゼロではない。そのことを心の片隅で覚悟するということだと思う。この厳しい時代に、朝日新聞社というリベラルな報道機関でジャーナリストの第一歩を踏み出すことができるのは、とても幸運なことだ。朝日新聞社の将来は結局のところ、君たちがそれぞれ個人としてどんな仕事をするかにかかっている。強くて、貪欲で、優しい心を持った一匹狼に育ってほしい。今、朝日新聞社は逆境にある。しかし、この逆境こそ、君たちを鍛える。赤報隊に襲撃された新聞社で働くこと、赤報隊を追って賢明な取材を続けた記者が多数いた新聞社で働くことに、覚悟と矜持を持って頑張ってほしい」

覚悟と矜持。この二つが、私を含めてジャーナリストのすべてに問われているのだと思う。

（2018 年 5 月 20 日）